

國家隨想



自然の中に生きてこる

女性

穂 苓 正 田

八年ほど前にカナダ横断旅行をしたときのことである。案内人の若い女性ガイドさんが「自然を大切にしなければならない」とわれわれ夫婦に語りかけてきた。

「人は自然界の豊みをあまり乱してはいけない。自然界には自然界の豊みがあるので、人がそれを乱すよつない」とをしてはいけないのです」と諭すように語つのだいた。

森の中で突然起きる「山火事」も時には必要であり、多くの樹木をなぎ倒して

しまつよつた「雪崩」さえも時には必要なだ」と彼女はやさしく口調で言つたのである。

純田の庭園を頂くカナディアンロッジキーの山々に囲まれた道路を自動車は走っていた。すると彼女は日本の「開いた松かさ」とは違つ、硬そつで小さな「松ぼっくり」をポケットから取り出してさりに続けた。

「この松ぼっくりの裏にはたくさん松脂が詰まつていて、普通地下一、三十七ノチのところに埋まつています。この硬い松脂は四十五度以上の温度にならないとゆるまないんですよ。

「山火事」で地面が焼けるとそれが解け、焼野原になつたがために太陽光が

しつぱに降り注ぐのでよつやく林を出すんです。それが大きく育つて樹木となり、やがて松の木の森林をなしていく。種の保存には山火事が必要なんですね」

松の木の樹齢は百五十年から百七十年だそだ。したがつて、遅くとも四十年

くらこの間隔で山火事がないと、森の形態が変わつてしまふ。モミの木の森林に変わつてしまふ。ところ語つた。

また、樹木が大きく育ち過ぎると、地面に近づくこれらの小さな木には太陽が届かなくなり、生育を害する。したがつて、時には「雪崩」が発生して古い大きな樹木を押し倒し、地表の小さな木にも陽が当たるようになるのが望ましいのだと。すなわち、自然のことなみである山火事や雪崩もいわば森の摺理であり、人間は人間の都合で森をこじるようなことは決してしてはならない、ところが彼女が総括だつた。

約八年前にカナダのモントリオールで

開催された国際航空宇宙電子会に出席したわれわれ夫婦は、帰路、カナダを横断旅行しようと、飛行機でカルガリに飛びそこから自動車でカナダ・イアン・ロッキーの入り口、バンフまで行って宿泊した。百四十キロメートルの道程だった。

この後、エドモントンは港までのロッキー山脈沿いの八百キロの区間をガイド付きで一泊三日の観光ドライブする約になった。言わば東京から札幌までの距離である。ものぐさな私がこんなに頗る旅の計画(?)をするはずもなく、すべて室内が計画したのである。

その昔、この旅行と同じルートをバスで観光旅行したことがあった。今から約四十年前、大学の医師に在籍していたころである。やはりモントリオールで学会があり、その帰路、このじきと同じようにカナダ横断の旅をしたのであった。時は九月中旬で秋の真っ最中。雄大なカナダの山々の美しさを堪能したのであった。

今でも記憶に残るのは、カルガリのよつてな地方都市の空港でも規模が非常に大きいといつことであった。

今回は道路の雪も解けて、どつにか自動車が通れるよつてなった五月初旬である。真っ青な春の空に純白の雪山が輝いていた。カナダの山々の景観は、スイスとは違い、すぐ近くから見るか彼方まで

雄大な景色が切れ目なく続くのである。以前にこの地に来たとき幻想的な美しさを覚えたレイク・ルーズは、湖面がまだ雪に覆われていた。雪を溶かすために撒かれた塩に惹かれて山羊が道路上に顔を出すので、ガイドは運転に細心を払っていた。

三回来な」とこの地の本物の良さはわからぬこと、ガイドが言った。雪の残る季節、雪の解けた季節、紅葉の季節である。

驚かされたのは、前回来たときアイス・フィールドセンターの店の前まで雪壁で覆われていたのに、「地球温暖化」によつて

か二キロメートル以上にもわたり雪が解け、黒い土が現れていたことであつた。あいお土産屋さんに、付近の昔の風景や雪壁の様子の写真が飾っていた。それを見ると、一目瞭然、雪氷が次第に解けてゆく経過がつかがえた。

今でこそ新聞やテレビで「地球温暖化」とか「環境破壊」について、いろんな報道がなされてはいるが、そのことはまだそんな話題に及しかつた時代である。時間の経過によつて世の中が変わつたところにしても、季節の違つてつづくにもよるが、同じ区間を通りてみて、自分がどの感覚の方が違つて驚いた。それは決して自分が年齢をとつたことだけによるものではないようだつた。

すなわち、この旅は、人間と自然環境とのかかわりを私に考えさせてくれるものでもあつたのだった。

ジアスパーのホテルに泊まる。田波は遅く、九時過ぎである。バンフから二〇〇

○キロ。メチチ湖、マリン湖を過ぎる。マリン湖のレストランの売店で家内がマリン・モンローのポートレートを買つた。モンローがこの地に映画撮影で訪れたときに有名な『真家が写したものだ』そつて、五十ドルであった。

人はほとんどなく、人や車に滅多に会はない。左右の景色は変化もない。雑木が茂つてゐる。信号機もなく、今まで真っ直ぐなカナダの道を、若いガイドさんは案内してくれた。

イエローハイウェー（黄色街道）と呼ばれる道がつねつたよつて、上り下りしている。「エドモントン空港まであと百キロ」の看板が出ると、草の緑が濃くなり、牧場が多くなり、アルバータ牛の姿が見えはじめた。町が近づき電柱が、そして電線が目に付くよつて、石油掘削の機械が動いている。

ガイドの彼女は千葉県生まれで、斯基が大好きだと聞か。それゆえ雪の多い

カナダに魅せられ留学し、アルバイトで観光案内の仕事をしているのだ』と話した。さらにカナダに住んで結婚したいと語つていた。

いつから彼女があのよつて自然を愛して、自然の美みを考へるよつて、なつたのが、聞けなかつたことが残念に思はれてならない。

美人の話

池田壽雄

『世界の三大美人を知つていますか?』

と、エジプト旅行の現地案内人のアハメドさんが、我々観光客に質問した。

『残念ながら、全部エジプト人ですか?』

といひで、現在開催中のカナダのバンクーバーの冬季オリンピックで美人の噂が高いのが、カーリングの『田黒 萌絵(メグロ モモ)』選手である。2月22日現在は、日本チームは2勝2敗であるが、その司令塔として活躍している女性である。成功率85%といつて得点率を誇っている。

実際、試合中のモード選手の表情を眺め

『ラムセス2世(第19王朝の大王)の第一王妃であったネフェルタリビ』アメ

していると 集中している顔がとても美しい。

テレビでアップされた 真剣そのもの

の、田の輝きは何物にもかえがたい。

女性は ただ美しいだけではダメで

もう一つの特別な能力が備わっていない

と『美人』とは言わねば「ものふしい」。

『小野小町』の場合 その美貌のほか

に 和歌の能力をもつていた。

花のいろはひつにけりないたびひに

我身よにふるながめせしまに

『ひつねひもなく』『花』は桜が第一義で
あるが、それから転じて『女性の美しさ』
を意味する。『よにふる』は『世に経る』
とか、『古』とか、『降る』など縁語が

ある。『ながめ』は『長雨』や『眺め』

【通じ】

歌の表の意味は、

「桜の花の美しさはひとつ移つ変わって
しまいました。長い雨が降つていて聞こ
え隠された意味は、

伝説化された美人の地位を得たに違ない
い。

整形美人が最近は増えてきた。単に『一
重瞼』が『一重』になつたり、低い鼻を
高くしただけの美人ではなくて、最新の
美容皮膚科では、ボトックスの注射で
皺を消したり、ヒアルロン酸液の注射で
皺を伸ばしたり、レーザーで『あざ』や
『ほくろ』や『しみ』や『瘢痕』を消し
たり、自由自在である。化粧液を塗つて
消す作業が不要にならか、毎朝化粧に
使う時間を大幅に節約できるのも魅力ら
しい。『整形美人』の定義も相應変わつた
のではなかろうか。スッピンの定義も変
化したに違いない。

「私の美貌も失われてしましました。世
の中の苦労に揉まれてここに聞こえますや
昔の面影はありません」

掛詞（カケコトバ）や縁語（ヒハグ）
を使つた、技巧的な力作であるのが容
易につかがわれる。小野小町もこの小倉
(オグラ)百人一首の歌によつてこな

映画の『ローマの休日』で主演した
オーデリー・ヘップバーンも実に美しか
つた。今見ても大きな魅力的な目、鼻、
唇など十分に魅力的である。でも、55歳
になつて、来日した彼女の姿を見てガッ
カリしたファンが多かったのではなかろ



チーム青森の目黒萌絵選手

うか。高い鼻は、意地悪な悪魔のおばあさんを連想させたし、瘦せた表情は、ただ皺が多い老婆の姿そのものであった。『花の色はつづりにけりな』は、実に残念ながら、そのまま當時はまつていた。

蝶と私の物語 第二話

チョウ大好きオバサン

大塚博太

その人は、我が家すぐ近くに住む患者さんなのです。そして私が蝶が好きだと知ると、図鑑を携えてこまめに診療所を訪ね、診療はそしこにして蝶談義にと嘸は進んで行くのです。

そのオバサンの家には、犬が4匹飼われています。そして毎日朝、夕2回2匹ずつを連れて上野の山不忍池に散歩に出かけているのですが、そこに生えてくる木や草の名前は、聞けばすぐに教えてくれる程の植物通なのです。そして蝶に

於いてもまたしかし。所持してきた蝶の図鑑を見せて貰いましたが、書き込みの跡も大変なもので、よく読まれておりその博学振りは正に脱帽です。

そのオバサンがある日（詳しくは十月六日）、蝶の幼虫（クロアゲハ）とその幼虫がついているカラタケの枝を育てて、じぶんなさこと持つてじられたのです。以前、蝶を育てたこともあり、私は喜んでお受けしたのです。

早速、虫籠に入れて様子をみてみると、幼虫は一週間もしないうちに蛹に変わっていました。何もしないで様子をみていて大丈夫ですよと言われた言葉を忠実に守つて、じつと黙つて蛹を見ていたのですが、不安も伴つ毎日です。

十月十九日、オバサンよりジコランダを一鉢頂戴する。蝶の好む木でどんどん大きくなるとのこと。大きくなつたこの木に蝶が群がり舞つ姿を想像し、夢の世界に没頭しているのが、この所の私の毎

表紙の言葉 大武秋笙
(茅ヶ崎市)

「新緑の奥多摩」

昨年六月初旬、奥多摩で撮つた写真の一枚です。東京都医師歯科医師協同組合写真同好会の日帰り撮影会に参加した時のものです。

梅雨のはじり連日小雨模様が続く中、幸いに降られず日中どんよりとした一日でした。撮影には不向きな天候です。バスで寺や花園、渓谷を廻りましたが、ものになりません。

夕方最後のポイント奥多摩湖に行く車窓の両側は濃い緑、時々湖面が樹間から見えます。東京にもこんな所があるのかと感嘆するのは小生のみではなかつた。山も湖も緑の中に真赤な橋がかかっていた。三脚を立て、うんと絞つて撮りました。

(第39回医家写真展出展作品)

無精卵

つ語源説がある。

豊 泉 清

我が家家の猫の額ほどの庭は、約30年前に開業して以来、暇あれば手に入る雑木を片端から植えまくっておいたために、今では足の踏み場もないジャングルのような様相を呈しており、市街地のど真ん中にも拘わらず様々な野鳥が飛来するようになつた。餌台に撒いておいたパン屑や残飯を入れ替わり立ち替わり啄ばむ姿が部屋に居ながら眺められる。

数年前にジョービタキという鳥が初めて我が家家の庭に姿を見せた。ジョービタキは漢字で「尉鶴」と書く。大扇や中扇など軍隊の階級の尉は「い」と読むが、熊楽に登場する老翁を指す尉は「じょつ」と読む。鶴を「ヒタキ」と読む。この年齢になって初めて覚えた漢字である。ヒタキの鳴き声は火打石で火を起す音に似ているので、「火焚き」に由来するとい

鳥の名称の漢字は鶴、鳴、鶴、鶴、鶴、鶴、鶴、鶴など、大部分は旁(つくり)に鳥を書くが、鶯、鶯、鶯、鶯、鶯などとのよつて下に鳥を書く字もある。カラスには鳥と鶴、ハトには鳩と鶴、トビには鳶と鶴といつ二つの漢字がある。源頼政が紫宸殿で退治したとい

う「スエ」といつ伝説上の怪獸には夜に鳥と書く「鶴」と空に鳥と書く「鶴」といつ二つの漢字がある。「スエ」はクロシグミといつ鳥の異称とも言われている。ガチョウを意味する漢字には、我と鳥を横に並べた「鵝」と縱に重ねた「鶩」という字体がある。

朱鷺、家鷺、雲雀、軍鶴、矮鶴、水鷺、木鳩、鶩、翡翠、金糸雀、不如帰、百舌鳥、啄木鳥、信天翁、善知鳥など、宛字読みの鳥も多々。朱鷺(トキ)には鶴、家鷺(アヒル)には鶩、百舌鳥(モズ)には鶴といつ一字の漢字表記も

ある。ホトトギスには不如帰の他に杜鵑、子規、時鳥、蜀魂、沓子鳥など何通りもの宛字表記がある。善知鳥を「リ」と読む。海に棲む水鳥の名称で、能楽の演目にもなつていて、青森市内に善知鳥といつ神社が鎮座している。善知鳥は難読文字の横綱級と思われる。翡翠(カツヤミ)を「ひすい」と音読みにすれば宝石の外称に変身する。

古代中国の想像上の怪獸で、某ペール会社の商標に描かれている麒麟(キリン)は、麒が牡で、麟が牝を意味すると漢和辞典は説明している。やはり想像上の聖鳥である鳳凰(ホウオウ)は、鳳が雄で鳳が雌を意味し、鶩(オシドリ)も鶩が雄で、鶩が雌を指す。

燕(い)と鳥と鳥も鳥の名称だが、燕と鳥は「(れつか)」といつ部首に、鳥は木偏の部首に載つてあり、鳥の部首では見つからない。雀、雉、隼、雁などは隹(ふる)とり)といつ部首に属してくる。隹は文字通り「古に鳥」といつ意味で、昔はこ

るの字体が鳥を意味していた。また雄（おす）と雌（めす）も隹の部（す）に属（す）している。本来は鳥のオスとメスを指しておらず、獸のオスとメスは牡と牝で表わす。ゆえに鶏のオスとメスは雄鶏、雌鶏と書かれ牛のオスとメスは牡牛、牝牛と書き分け

るに備わった特性があり、他からもやみに手を加えるべきではないことにつづくのである。

上に大袈裟な手段を用ひる體でない。また史記に載つてゐる鶏口牛後と云ふ文にも鶏と牛が同時に登場する。鶏口となるも牛後となる勿れと詠みトす。終じて鶏口牛後と云ふ。

論語の泰伯篇に「鳥之將死其鳴也哀、人之將死其言也善」という文が載っています。鳥のまさに死なんとするや、その鳴くや哀(かな)し、人のまさに死せんと

かねがわの血や墨つゝ読み下す。死にか
らひに一ふ蝶の蝶や蝶が蝶づかぬ一觸つゝ

る。 短い文の中に鳥の名前が四種類も登場す
雀いすくんと鴻鵠の志を知らんや」と読
み下す。燕と雀は小型の鳥であり、鴻と
鵠は大型の鳥である。小人物には大人物
の遠大な志が理解できぬ譬えである。

里の遠くまで繰り、太平の世の中の形相である。

Eine blinde Henne findet auch wohl
ein Korn.

い。島はカモの仲間の水鳥である。鶴の足が長いからといって切り取ってしまうと、鶴は悲しむ。カモの足が短いからといって継ぎ足してやればカモは迷惑がる。物にはそれぞれ自然といふ大意である。

『諭語の陽徳真篇』に「割鶏焉用牛刀」という文が載っている。鶏を割（さ）くにいざくとぞ牛刀を用いんと読み下す。鶏をさばくのに牛を解体する大型の刃物が必要いたるうか。簡単な事をするのに必要以

「 田圃の鶏でも穀物の粒を見つける。」
田圃の鶏でも止端からの地面をついついてこ
れば、時には穀物の粒が口に入れる。積極
的行動は善などっこい警戒である。

「一羽の燕は巣立つ」などなご。

「一羽の燕を唄つた」などは巣立つが来たと

は断定せられて。世間は浮説の戒めである。

Vogel von einerlei Feder fliegen

gen bei sammen.

「四つ羽の鳥は二つ離れて飛びたが

れる」四つ離れて「類似友を離ら」である。

Bringen dem Hause Ungluck.

「雄鶏の卵は雌鶏の家庭不幸を

齎す」

雄鶏は大抵で雌を口に、雄鶏は小瓶で口

口」の聲るのが普通である。雄鶏が雄
鶏のよひに聞く家は災厄が来るといつ
て迷信が西欧各国にある。妻が夫を差し置
いて権勢を振るひ家庭は不幸といつ意味
である。ヨーロッパでは社會上位が通用
しづなことをいひ得る。

Hörer, die viel gacken, legen keine

「があがお嘗じへ雪へ雄鶏の卵を産まな
い」

「だけ達者で行動力のなゝ者の譬へであ
る。法螺吹きに限つて能無しである
が、幼い頃に「金の卵」などの言葉が物
語を詠んだりじがおな。おの卵が毎日一
個あつ金の卵を産むがナラウを飼つてこ
た。おの口への卵はガチヨウの腹の中
に金塊があると感じ、ガチヨウを殺して
腹を裂してみたが、普通の内臓だけだつ
た。田先の稻庭たゞし離れて、将来を見
据えた長期間展望をぐくこくの魔話であ
る。

「大半を卒業して社会人にしなる」学
校を「巣立つ」と形容する。鳥の雛が巣
を離れて「がく」が飛べるやうになると「巣立
て」。実力はあるが發揮する機会に
恵まれないと「泣かず飛ばず」と形容す
る。鳥でも飛ぶも鳥の個性じゆねば
思ひよ」巣立つせせたく、鳥が
「飛ばせかな」人間の成長過程を鳥の譬
えた慣用句や成句が多い。我が家の庭で
ジロー・レタキを観察したのが契機となつ
て、鳥が登場する漢文やエイソ語の格言
や日本語の比喩的表現を列挙してみた。
余談だが、改釋していないために孵化
しない卵を無精卵と呼ぶ、「私は素人隨筆
家の卵です」と発言する「無精卵だよ」
と貶(けな)されるに違ひない。蛇足だ
が、億劫がつて何をこなす急け顔を同じ
漢字を書いて無精者と呼ぶ。私は文筆の
才能に関しても無精(むせう)卵で、性
格的にも根つきの無精(ぶせう)者だと思ひてこそ。

日本語では金の卵を「将来が大いに囁
きられる可能性は若者の比喩として使って
こら。歯科生の頃に「医師の卵」といは
れたことがある。歯化して離れてや
がて一人前の成鳥になると期待せねば
外れ者を窮屈に覺えてしる。資格を取得し
たばかりで、まだ実地の経験がないこ駆
け出つの事例「ひよい」正體入りた

ジェノヴァ懐古旅行（2）

美濃部 欣平

ジェノヴァから 一番有名で近い観光地はボルトフィーノであった。ボルトフィーノへは、船で行った。船からの港を望む眺望が美しい。ここには世界中の大金持ちが集まるところ。しかし、その実態は、貧しい土地の漁師が底網漁業をして日々の糧をしのいでいる。私の電気生理工助手が、ネルヴィーに住んでいて、よくなこままで、電車か



コロンブスの生家の記念館



ジェノヴァの旧港の近く、アーケード通り



フェラリー広場からヴュンティ・セッテンブレ大通りへ

医学部出身の日本系カルフォルニア大学教授ジヨウ・山本を日本で友達から紹介をつけ、自宅へミネソタの情報を求めて訪問した。私はロス滞在中は、ペツツ君の下宿に泊まさせていただいた。

ペツツ君は、職を求めていたので、私が教授と念つのを知り、一緒に同道を求めた。ところが、お見えにならなかった。

世話をしてくれた。この合唱団は男女混声合唱団で、私は第一テノールのパートをいきなり受け持たされたが、未だイタリア語も十分出来ないので、且立つ第一テノールは一人で先導するところがあるので、残されて指揮者の個人教授を受けていた。

彼は医者ではない教授の奥様だったが、ペツツ君はアメリカの何処かへ脳波技師として働けるよう依頼した。結局は、英語も十分通じない彼の依頼は無理だった（後に脳波技師にも、免許をとる試験に合格して、資格がいることが分かった）。

私をボルトフィーノまで連れて行ってくれたのは、ジェノヴァ大学の精神科医の夫婦だった。妻の精神科医は、友達もいなかた私に、合唱団へ入会するよ



フェラリー広場の噴水の前で筆者



港に展示してある海賊船（乗船はできない）

このグループへ参加することで、沢山の仲間が出来た。仲間には、町の図書館に働くものや同じ学生寮に住む牧師さんの娘がいて、よくジェノヴァを取り巻む山々へのハイキングに誘われて参加し、娘さんを通して多くの知人を紹介された。このグループは、ジェノヴァの郊外、近隣の町へ出かけて公演し、遂にはミラノラジオ放送局で放送することになった。その時のテープは、未だに私の机の引き出しにねむつしている。その中には、日本人もいて逆に通訳することもあった。

ジェノヴァへの日本からのダイレクト航空便はない。留学のときは、イタリア船と間違つて、オランダ貨客船を予約した。帰国のときは、政府留学生にせば、船便に限り、割引があることを知り、ジェノヴァ発の豪華客船の特別一人部屋を予約した。船便は香港までしか行かず、香港に初めて立ち寄り、一週間あまり滞在することになった。

開業ABC (14)

中 村 雄 彦

銀行の支店長

私の父は地方銀行（新潟市に本店のある第四銀行）の常務取締を長く務めていた。母方の祖父もこの銀行の副頭取だったので私が銀行に入れば三世代目になる。父はもともと東京麻布の地主の長男で経済的に困らなく、東大経済学部を出ても定職につかず自宅で小説などを書いてぶらぶらしていた。しかしその後日制新潟高校を出たのが縁で新潟の銀行に就職する事になった。そして東京に家があるので銀行入行後も麻布の自宅から日本橋の東京支店に通っていた。私も東京に生まれ、戦時中の学童強制疎開で新潟市の母の実家に寄留するまでの10年間東京の麻布に育つた。

父は重役になる前の若い時は色々な支店の支店長を歴任していた。戦前でも銀

行は鉄筋造りだった。たとえば会津若松

支店は小さしながら鉄筋2階建てで同じ敷地に支店長室があった。若て行員が昼夜休みにピンポンやキャッチボールで子供の私と遊んでくれる。母が女子行員達を

自己に呼んで昼食を「」馳走する。当時の男子行員が夕方お風呂を貰いに来る。夜は取引先の客達が酒を提げて遊びに来る。

スキ焼きを「」馳走されて父と雑談。子供の私も相伴。父はいつも色々な人達から街の情報を得ていたのである。私も小さにながら自然に銀行業務について分かつていたようだ。

今はどうなっているか知らないが、

時々現金を支店に入金した現金を

新潟市の本店に運ぶ作業がある。朝早く若い行員と用務員の一人で大きいうりコック・サックに金を入れて汽車で出していく。夜遅く無事帰つてくるまで父は心配して起きていた。コンピューターの無い時代、計算はすべて算盤。一円でも収支が合わない」と行員全員が遅くまで残つて仕事を

していた。

父は2、3年で転勤していたが、支店長は今のよつに頻繁に変わらず、長い人は10年も同じ支店にいた。当然馴染みも出来、固定客も生まれる。

残念だったのは、東京支店長は重職といつことで代々重役が勤めていて、支店長の住宅は渋谷の松涛の女優の山本富士子さんの家の隣にあった。私は既に大学生だったが、夏休みに東京に帰省して回観板を持つて山本さんに会いに行こうと思つてたが、どうした訳か父は東京支店長にならなかつた。今でも惜しい」と思つてている。

このように昔の銀行は親身になつて客の面倒をみていた。今のよつに真くに担当が替われば、ドライな対応はなかつた。昔の銀行はよかつた。顧客を大事にし、親身になつて経営のアドバイスをした。大切な預金者のお金を有難く預かつた。いたずらに古つものがよいわけではな

いが、今の銀行は悪い。まずコンピューターを使つて全てを機械化するため、血の通わない業務となる。客の顔も知らない。

「こゝで私の平成14年に銀行の悪口を当地の医師会報に書いて好評だった文の一部を引用する。『昭和60年代のバブルの責任の一端は過剰貸付けを行なった銀行にある。ゼロに等しい金利の預金者の金を借り手に高利で貸す。銀行員は金を扱つただから安月給だと悪いことをしては困る』とつて昔から高給だった。昭和30年代なかば地方銀行常務取締役の父の月給は24万円。父と同年配の私の恩師新潟大学皮膚科主任教授の給料は円6万円、大学教授の薄給は今も同じだが、それにしても銀行員は高給である。

機械化の現在誤りはないかといつて大いにある。優良とされる取引先の地方銀行で一度ならず通帳に預かりと支払いを逆に記帳した。致命的なミスである。支店長が謝罪するどころか間違つた本人も

平気な顔をしている。

潰れる銀行も僅かながらあるようだが、当然である。政府の保護の下ぬくねくと生き延びている銀行はもっと潰すべきである。悪事の塊の銀行はますます相手にしない。

「こと。預金ばゼロは無理だが、出来るだけやめる。そして借りない。借りても生き延びている銀行はもっと潰すべきである。悪事の塊の銀行はます相手にしない」といふ。

銀行に限らず、全ての企業が金に振り回されている。もつと血の通つた仕事を

しないといいたい。不況、不況といったらずに黙れ立てることはない。

「医者は患者の痛みを知れ」とまくし立てるなり、企業も親身になつて相手の立場を考えて仕事をやるべきだ。若ひ人を指導する立場におけるアシスタントは十分に自覚して欲しい。

どのよつた職業でも楽ではない。そして皆さん懸命に仕事に取り組んでいるのは分かる。とにかく医師は勿論、全てにいえることは、田舎にとらわれず広い視野で世界を見渡す、それには長い修養期間と、絶えざる勉強、深い教養が必要である。生半可の勉強、教養では通用しないのである。



家族と（昭和47年6月）

力のサブプライム問題で世界経済は揺れている。マスクはいこを先途と離してゐるが、普通に暮らしていれば大した事ではない。世論に左右される必要はない。平静心が大切だ。

銀行に限らず、全ての企業が金に振り回されている。もつと血の通つた仕事を

石北本線

御園生 潤

「網走ですか？ JRでなら1泊しない

と無理ですね」と若手出張医のY先生に不しきと釘を刺されたため、初冬の石北路を1泊2日で旅することになった。若手の同僚の先生は「初冬の網走とは味のある旅だ」と羨ましそうである。

旅程は、ようやくとれた「秋休み」の昨年11月25～26日。乗車したのは往路がオホーツク3号、帰路がオホーツク4号だった。オホーツクは人気列車で満席の口も多いが、今回は往復とも何とか窓側の席を確保できた。

札幌駅7番線から9時41分発車、約1時間半かけて旭川へ到着する。最新鋭の電車特急スーパーかみいなら1時間20分で走り抜ける区間なので、ややスローナ感じだが、運用車両の最高速度の違いで、このような差が生じる。オホーツク

の運用車両はキハ183系で、北見で常紋峠と2つの急峻な峠を越えるのに必要なパワーを有しているが、昭和50年代製のものも含まれ、いささか歴史を感じさせる古参車両である。

札幌では雪はなかつたが、音見沢を過ぎてからと旭川の手前から、散布したような積雪の名残が所々に認められた。嵐山トンネルを過ぎると旭川の街並みが目の前に広がり、家々の屋根には夜間降つたと思われる残雪が見られた。

旭川駅は1、2番線をスーパーかみい優先に使用しており、石北・宗谷本線の下り特急列車は3番線に入る。5分停車。旭川からはしばしの間高架となり、旭

川四条駅を通過して宗谷本線と分かれる新旭川駅へ向かつ。駅の手前でロングレールから通常のレールに変わり、まもなく制動がかかって、ポイントをわたり石

ヨイント音を楽しむ。

プッシュブル運転（前後にディーゼル機関車がついている）で急勾配に供えたコントナ満載の貨物列車を待たせて白滝を通過。丸瀬布の次は遠軽に停車。接続する普通列車が見えていた。方向転換スイッチバック（するため、運転士は最前部から最後部へ移動、乗客も座席の向

り普通列車が待つ桜岡を通過、当麻あたりからは次第に積雪量が多くなる。刈り取りが終わつた水田や畑の土と雪の白がコントラストをなし、美しかった。上川に12時ちょうど着、次の中越（なかごし）信山場では上りの特急待避（7分停車（運転停車）。札幌から網走まで通し常務の車掌Fさんの全て肉声で味のある丁寧なアナウンスが入る。駅間距離の長いローカル線であるため、ダイヤを工夫してもこういったことが少なからず生じる。上越信山場を過ぎ、分水嶺の長いトンネルを抜けると、下り勾配にさしかかり、制動をきかせながら、心地よいジョイント音を楽しむ。

を変えるのに忙しい。

常紋峠のトンネルを越えると、右手にスイッチバック形式の常紋信号場がちりと見えた。留辺蘂を過ぎると国道39号線と並走、相内（あいのない）、東相内と通過し、北見到着のアナウンス、踏切解消を主目的に設けられた北見トンネル



網走駅前郵便局の風景印付印

（モチーフは斜里岳、
流水、ニボボ）

差異が見事で、上越信場あたりの風景はまさに冬本番をつかがわせるものだつたが、低地に降りるに連れ積雪がなく、同線の起伏、勾配のきつさ、厳しさを皿の当たりにした感がある。

石北本線と私の関りは昭和56年6月に始まる。旧型客車時代の夜行急行「大雪（たいせつ）」で美幌駅に降り立つたのは、家族で向かつた大学祭の休みの道東旅行の時だった。当時、わが家は、父方の親戚縁者との財産にまつわるトラブルに巻きこまれ、四面楚歌の状態にあつた。若くして我が家を有したものとの様々な形で圧力・脅威を向けられた今ば「き父も、自分の判断力の甘さが原因とは言え、大いに悔いたことであつて、私自身も、医学部の年次が上がってゆき、同期が次々と専攻科目、研修先を決めてゆく中で、自分の足下が定まらず、将来について、懼する状況におかれず、もだえ苦しんだ。今回の旅行では、標高による冬景色の

病理学講座の太学院生として卒後のスタートを切ったのは、一種の「モラトリーム」であつたが、次第に臨床病理の勉強にひかれて行つた。病理医としての将来を見据えていた時に、自分の体況に大きな欠陥があることが判明し、途方に暮れた。指導教官が教授選で惜敗したこと、加えて、私自身が一人っ子であるなど要件が重なった。

生まれ育つた我が家から逃げるように去り、現在地に新居を構えたのが平成3年7月。大きな、無謀とも言える賭けであつたが、何とか勝り、今日に至つている。件の親戚とは完全な絶縁状態に至つているが、その身内には不慮の事故死、若年の病死などが続き、過去を知る人は「因果応報」と、我が家びいきの評価をしてくれるが、わが家の心はすつきりとは晴れない。生まれ育つた家も平成9年7月に非常に難航した交渉の末、立ち退き、取り壊しなくなつたが、その際、6年間他人に賃貸していたとはいえ、幼

を抜け、定刻に北見着。ここに上りオホーツク6号を交換。

この後は美幌、支笏湖と停車、やがて現れた初冬の網走湖を眺め、5時間28分の旅が終わつた。

常紋峠のトンネルを越えると、右手に

少期からの様々な思い出し、何本もの思い入れの深い樹木がともに瞬時に破壊、伐採された時の悔しさは家族皆が生涯忘れないものであり。

一方、現在の勤務先病院の入院患者の家族・親類の中にも、評価の手厳しい看護師たちをつららせるほど結束力を發揮して、老親・兄弟等の世話を励む家系もあるから、恥ずかしながら、わが家系は、こつした点では未熟であったと言わざれども致し方はなかつ。

こつした青春期の苦悩・困惑・矛盾を癒さうと、私が現実逃避にふと飛び乗つたのが、「オホーツク」「おおとう」「大雪」といった石北本線の特急、急行であり、接続する普通列車に乗り換えた晩冬のつららかな「冬停」の旅は、登場間もなかつたキハ40型気動車の走行音と共に生涯の思い出である。

当時、開業医の一世などの裕福な家庭に育つた同級生は、入学直後から、自家用車を有し、恋愛に励んでいた。こつし

た世界は私にとって異次元の世界に映り、自宅でも講堂でも安堵感を持つて生活し得なかつた。最近になり、当時から現在に至る私を含めた親戚問題による精神・心理的動搖、障害を生じせめた因果関係が少しずつ洞察できるようになり、冷静になつてきた。

「認定病院医資格まで取つて（転科して）もつたいない」と知人の医師からば、わが家の歴史を知らぬが故に、こつした言葉をいただくが返答に窮してくるというのが本音である。

今回の道東（オホーツク）訪問は3年9ヶ月ぶりであつたが、今後は、価値観が近似、お互いに了解し合えるような身近な友人をもつと開拓し、良き「メンターリー」として、これから生涯の財産としてゆきつと考へてゐる。

平成十一年 孝謙天皇遷忌一百三十年記念して西大寺に万葉歌碑建立
平成十三年 脳卒中でバッタリ（馬鹿衝きで過労のため）
平成十四年 左半身回復して現在に至り
老衰は停止せざるも、日本大学より
本年一月「桜門春秋」に自由題で執筆依頼され、「孝謙天皇」の題で次の文を書きはじめた。

歴代の天皇のなかで、医師の技術が低下していくことに心を痛められ、いましめの詔を発せられたかたに、第46代孝謙天皇（749～758、重祚して称徳天皇764～770）がおられるることは余り知られていない。

天皇は、自身の難病を、唐から渡来し

孝謙天皇と奈良西大寺

田 村 豊 幸

1

（本文の前半部分を、北海道医療新聞社の許諾を得て転載させて頂きました）

た薬石と心の手当ての巧みな看病僧のおかげでよくなつて以来、医療に深い関心をお持ちになられ、以前からあつた大宝律令典薬寮（くすりのつかさ）を通じて誤診誤薬をいましめられた（天平宝字元年・757年十一月九日）よつてある（以下略）。

おりもおり、万葉歌碑でお世話になつた故大養孝先生第一の高弟、甲陽学院高等学校山内英正教諭から四月一日より、万葉歌碑めぐり講座が始まるることを知り

され、西大寺の孝謙天皇歌碑がその一番に入つてることがわかつた。歌碑めぐりはAコース10個所、Bコース10個所である。平城京遷都一二〇〇年祭で、年十一回、犬養万葉記念館に協力する会の講師が案内してくれるのである。回五〇人に入れた人は幸運である。



西大寺境内に寄進できた歌碑

を考えたが、西大寺境内という場所が場所

〔2〕
当時、孝謙天皇歌碑を寄進することを改めて調べてみると、孝謙天皇は藤原一族の出身で、藤原は元をただせば関東出身の説もある。側近に仕えた采女の中には貴族たちにひそかな恋を抱くものもあつたことが、万葉集からうかがえる。宮廷生活で垢抜けした采女が、郷里へさがつたとき、都からの官人を迎えて国司が催す豪席には、父兄の郡司らと出席して、席をとりもつこともあつた。京都において教養を身につけ、女官に昇進す

最近、長身の女性が今年も両親と一緒に西大寺境内に寄進してきた歌碑に行つて来ましたといって、写真を送つてくれた。

〔3〕

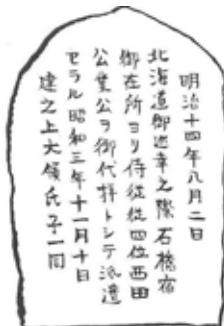
だけに、それを建てるとは現状変更になるため、文化庁の許可がなかなか下りないのでないかと思うていた。しかしあの世から天皇がお力をくださつたのかあるいは私の知らないどなたかのおかげで、建立の許可をいただけた。翌年倒れる前のことだつた。

る」ともあつた。『続日本紀・神護靈臺』年六月戊寅条には「掌膳常陸國筑波采女從五位下勲五等千牛宿禰小家主」とありて、この女官は平城宮跡から出土した木簡に「小豆・醤・酢・未醤など四種のものを筑波命婦あてに支給すべし」とある。その筑波命婦同一人であるといふ。

法華寺から宮内省大膳職にて出した請求伝票で、この人は近江保良富から帰つて法華寺に入つた孝謙天皇につきしたがい、その御膳を担当しのちに帰国して國造に任せられてくる。國立文化財研究所・平城宮発掘調査報告に、そのことが明記されている。

これは、物凄い出来事である。このよつ
な筑波国造が、おつかえしていた孝謙天
皇や、天皇に忠義をつくして、いた四削道
鏡を、常陸国へ帰つてきし。悪くこつは
ずはない。

む所を内裏といい、皇后の住む所を後宮といい、後宮には有位の女官と各種雑役にしたがう女嬌・采女がいた。采女



明治天皇が侍従に代挙させた記念碑



孝謙天皇は、當時その身のまわりをお世話をする采女といつて、地方豪族から宮廷に捧げられる美女がいた。男の天皇が住

は地方の郡の少領以上の伝統ある豪族の姉妹や娘たちの中でも、特に姿の美しい女で、広義の女官には上から尚・典・掌・女嬬・采女の階級があつた。諸国から年に百余人の女が貢進されるとい、中務省の采女司の占様を受けた。

点検は凶相と吉相に区別し、前者には白目がちで黒目の小さい女、真直ぐに歩けぬ女、舌が大きく頭の大きい女などがあり、後者はヒフは滑らかに潤い、肉つきよく、正直で心と口が和やかで声のきれいな心の優しい者がえらばれると記録にある。

その頃は今の北関東に余り考えられないよつな女が、珍しくも発見されて、関東の大河を経て舟で都へ送られていたらしい。海路は季節によれば陸より安全だ

孝謙天皇は天平宝字二年二月(751)に詔を下して庶民の酒飲みをいましめ

「この道理」ともいひが多いのも

そのせいで自立つておられた。立派な詔である。

孝謙天皇は歌心も豊かで万葉集を大伴家持に命じて編集させておられた。大伴氏が酒歌を万葉集に十二韻も加えているのも面白。

このたびのなり万葉歌碑めぐり講座の中の西大寺の所では、以上の話も少し役立つかもしれない。

なお、栃木県下野市石橋には、孝謙天皇神社という立派な神社の境内に、「孝謙天皇」の碑がある。明治天皇が東日本宣撫大旅行の途中、かわりの者に参拝させたほどの史蹟もそこにある。下野国からも孝謙天皇におつかえした采女がいて、帰國後、孝謙天皇の豊かなお心に感謝して供養のために建碑したもののが、誤り伝えられて天皇御陵と称されているのである。明治天皇はそれを御存知のうえで、西田侍従を命じて代拝させたものと私は思い、明治天皇のお心の豊かさを想

つのである。

ちなみに、いまも采女の子孫かと思われる数人の一族が石橋に住んでおられ、そのうちのお一人は、私の大学の後輩であるから、不思議な縁といつよりほかは無い。

小説作法講座

作家 伊藤桂一氏から学ぶ

浜名 新

「タイトル」は、読売日本テレビ文化センター荻窪で開催された「文芸・教養」講座のひとつです。私は還暦を過ぎる頃、専攻の脳神経外科診療の忘れ得ない治療体験の文章を書きたりなりました。新聞で当講座を知り、申し込みをすると満員でした。諦めているところ後、講座担当のYさんから「欠員がでましたが入会できますか?」と電話があり、直ちに手続きをしました。確か平成13年の頃です。

私は28年間勤務した都立病院を退職し、平成16年4月から回心堂第2病院

内科へ転向し、長期療養型病院で「終末期医療は延命治療」との考え方を実践し、「死」を身近に体験し、「死」をテーマにするような作品を心がけるようになります。

した

本講座は著作者のための講座で、「自分の感情や考え方を文章で表現したい」と持

ちを持つていてもその機会が無く、また作品を批評してもらえる場もない方たちの教室です」とあり、小説・隨筆・紀行・ノン・詩等提出枚数は約20枚でした。

作品を提出すると次回の講座で、伊藤桂一先生が直読された一枚の講評を貰は受けとり、先生はその場で作品を解説・講評するシステムでした。先生は作品にまつわる話題、閑話休題の話など、会員をひきつける最大の魅力でした。温厚な人柄で敵を作らない、運命に逆らわらない、自然体の生き方が信条と承つております。

入会当初、会員諸氏のつまじ文書を拝見し、たじたじとなりました。手馴れた

文章に圧倒され萎縮しました。作品を提出しなければ講評を受けられません。恥も外聞もなく、勇気を出し、自分を晒けだして、その頃ハイキングの余に参加していた関係で、旅行とか山行の行動的記録文の作品などから入りました。少し慣れてくると、体験的脳神経外科の臨床治療における患者・家族と医療関係者主に医師などとの心理的葛藤を浮き出すように心がけました。治療体験では、そのまま記述するわけにもいかず、フィクションを交ぜ、手術・術後の出来事についての、現場の医師の嘆き・感想を拾つて、工夫してみました。外科治療には悩ましい合併症がありますので……。

アマチュア作家? の手慰みに過ぎませんが、「新風舎」から「くも膜下出血」とのバトル・大谷明氏の場面、「銀色のクリップ」・水谷勝治氏の場面、「谷川岳滑落事故」・高次機能障害から復活できるか、「老人介護と安息病棟」医師と看護師の苦悶と叫び、「小説を自費出版でき

ました。非常に残念な」と、時流に乗り順風満帆だった「新風舎」でしたが、倒産に追い込まれてしましました。版権は「文芸社」に引き継がれ、再度出版を誘われましたが、パスしました。

伊藤桂一氏はあまりにも有名な現役の詩・短歌・連句・小説など幅広い分野で長年にわたって活躍されてきた作家です。戦記作家としても有名で、現在92歳でこれからも戦中世代の代弁者として「戦記の仕事をしなければならない義務がある」と熱き情熱を常に語っておられます。健康に留意され、活躍を祈念申し上げます。

先生は大正6年(1917年)三重県三重郡神前村、天皇御高角山(大日寺)に生まれ、昭和12年徴兵検査官種(日格)、翌年皇室野騎兵第15連隊入隊、昭和15年晋南作戦(中国)に参加、短歌200首作る。昭和18年左

倉兵157連隊に召集・出征(中国)。昭和21年佐世保へ復員。昭和23年上京。詩・小説・作品発表。昭和37年「盆

河」で直木賞受賞。昭和59年第3回芸術選奨文部大臣賞及び第38回吉川英治文学賞受賞。紫綬褒章。昭和68年日本現代詩人会長。平成9年詩集「連翹の帶」で地球賞受賞。平成13年日本芸術院恩賜受賞。日本芸術院賞。平成14年勲3等瑞宝章。平成18年四日市短詩型文学祭に「伊藤桂一賞」制定。平成19年詩集「ある年の念頭の所感」で三好達治賞受賞。21年四日市市に「文学碑」が建立された。伊藤桂一氏主催の「小説作法講座」(午後6時半から8時半)は2010年3月19日を以って終了。同日、講座に先立ち、会員主催の「惜別の宴」は、荻窪ルミネ5階にある京料理の店「錦」で和やかに執り行われ、伊藤先生から会員1人1人に「色紙」が手渡されました。私が頂きました色紙の「詞」に珠玉の歌が、碧潭の水に抱きこめられたまま

椿の落花はとめどなく朱を吐く
長く間ありがとひじやこました。

伊藤 桂一

旅の記憶（1）

有泉七種

小田原城

高嶺となつて解散してしまつたが、親しい仲間だけの集まりがあつた。同じ教授のもとで研究をかさね、その成果によつて、学位記を受領した門下生だけの集まりであるから、全員が医学博士。それだけに、毎の勉強会は活気にあふれた討論で終始した。そして、夜の、置酒歡談の席は、更けゆく夜の、時を忘れるほどに、親しく、楽しい、語らいの場であつた。

く見物の人々の雜踏であるが、それにもかかわらず、城の周囲の堀は澄んだ水をたたえ、老松が常緑を映し、絆鯉真鯉の群が彩りをそえて、折からの、春のそよ風にひかりががやいていた。

の美しさに遊ぶことは無理なのが実情であった。ところが、西園園での常連の一人は、「高遠の桜を見るなら、早朝にかかる」と主張して、譲らなかつた。ものは試しだ! 出かけてみるか...と思つ立つて、朝、四時起きして、高遠へ車を走らせた。

風光る陽春のころ。人^レ建造の城ながら、長い時代の流れの中で、周辺の自然にとけこんで、平和、そのものの眺めで、あつた。

まさに夜明けだ。高遠城址公園には、三人のカメラマンが三脚を立てているだけで、ほかには、人っ子ひとりいない。

ただけに、毎の勉強会は活気にあふれた
討論で終始した。そして夜の、置酒歡
談の席は、更けやく夜の、時を忘れるほ
どで、親しく、楽しい、語らいの場であ
つた。

昭和四十四年の春の余合せ 箱根の湯
元のホテル。帰路、小田原市内を見物す
ることにした。小田原提灯とか小田原許

高遠城址の桜

春宵のひとときあるきつけの臣源國は常運でござわってこた。折から、桜の花の咲くいひ。その花の名所や花見の宴の様子など、わがわがまだは題目で談讐風発。そんな時、たまたま、伊那の高遠城址の桜が話題になつた。

昭和四十五年の春の奈良
箱根の湯
元のホテル。帰路、小田原市内を見物する
ことにした。小田原提灯とか小田原許
定とかいうが、小田原は「城」である。
戦国時代から、不落の城といわれている
ように、権力と財力と支配力と、そのま

確かに伊那の高遠城址は桜の名所である。やがて桜のいわいせなれば遠近からの観桜の人々で雜踏し、花の下は放歌乱舞の酒宴で喧騒、心静かに、花

龍」の中の重てあつたには、たの西
空には、中央アルプスの残雪が、朝日じ
かがやいていた。
高遠の「ヒガンザクラ」とは、また、な
んと美しいことか!! 心にしめる眺め
であつた。

老桜の咲きあふれたる夜明け空

輪島の夕市

日本整形外科学会の学術集会は陽春の四月。会場は大都市が多いが、時には地方都市のこともある。そんな時は、学会での勉強もさることながら、終了後の観光も楽しみのひとつである。

昭和四十七年の春、この時の学術集会は金沢大学。学会終了後、金沢の市街を観光したが、やはり、金沢は、加賀百万石の城下町である。兼六園をはじめとして、古くからの伝統に培われた、おなじきのある奥床しい眺めであった。

翌日は能登半島の観光。起点は輪島。

ここは漁港の町であるが、朝市と夕市のいきわいで知られている。観光バスの都合で、朝市は無理であったが、夕市だけ見ることが出来た。

土地の人の話では、朝市に比較すると夕市は四〇パーセント程度の活況だそつであるが、それにして、大きな市の盛況である。品物の大半は魚類と野菜類。折から、夕餉の買物である。それに観光客

も加わっての雑踏である。魚や野菜の放つ臭いと、人いきれの中、売買の声がとびかい、活況そのものの眺めであった。そんな雑踏をはなれて、夕市の出口のちかくに、数種の切り花を並べて、一人の老婆が、黙然と座っていた。時に暮春の遅日のこと、つづく淡い光の中に、黄水仙の彩りが鮮明に浮かんでいて、北国の暮春の静けさが偲ばれる眺めだった。魚異はなれて夕市の黄水仙 七種

鳥居崎

村田町の事情で廃止されてしまつたが、「芭蕉を偲ぶ鳥居崎の俳句大会」は楽しい俳句会であった。スタートしたのは昭和五十六年、いのではなかつたるうか。年

一ことに参加者も増加して、長野県でも屈指の俳句大会までに発展したが、多分、村田町の財政事情によるのであるが、廃止になつてしまつたのは残念である。

鳥居崎の俳句大会は、毎年、青葉若葉の季節。村役場の案内で、崎の道の吟行

を楽しむのが恒例であった。崎の道はトンネルが開通してから、廃道の状態ではあるが、晩春初夏の季節だけに、桐の花が咲き、山藤が咲き、朴の花も桟の花も咲いていて、木立には、松蟬の声がゆたかであった。崎の頂には、昔からの、そのままの姿で、神様がまつられていた。ものの書物には、「トオグ」は「タムケ」に由来するもので、旅人が供えものをして、旅の安全を祈願したといふ。と、誌されていながら、風化した崎神の姿には、昔の旅人たちの素朴な心がしのばれて、じとなく、心の洗われる眺めであった。

松蟬や古づくものに崎神 七種

権兵衛崎

ある年の一月、木祖村主催の「芭蕉を偲ぶ鳥居崎の俳句大会」の終了後、権兵衛崎を越えてみると、した。

木曾路から伊那路への越えの道は、ゆるやかな上り坂であった。おそらく昔からの、「三ツコノイアバヨ」の崎道では

なかつ。林道を拡幅したよな、谷川にそつて、一部舗装された道路であつたから、周辺の風景を十分に楽しむことができた。

峠の頂上に近づいたころ、谷川にそつて、美しい白い花が咲きみちてゐるのが目にとまつた。梅の花である。小梨の花ともいつそうであるが、大木である。その大木の枝いっぽこに、白い小さな花が咲きみちて、折から瀧みきつた青空に映えていた。明るく、清らかな山中の眺めであつた。そして、その大木の根元に、「岩魚止り」と書いた小さな木札が立てあつた。溪流魚では、鮎の上流が山女、山女の上流が岩魚の生息地とかいふ。とすれば、標高千メートル位か。梅の花といい、岩魚止りといい、折から晴天のもの、清らかな谷川の響きの中、山氣によいよ身に迫る眺めであつた。梅咲いて岩魚止りといひといひ、十種

自戒五ヶ条

古賀行雄

今年の元旦に、私は七回目の寅年を迎えた。

干支の当たり年だからと書いて、特にいい年とは限らないことは百も承知、だがそれでも何となく縁起を担きたくなるのも人情。

二、三十年にもなるだらうか、元旦の

剣道の初稽古に参加するよになつてから……年越しのお宿参りと、午前十時から、この高校での初稽古をさせないと、御

層蘇を飲み干す気分になれなかつた。

今年も去年の歳末から氣構えだけはしていただが、生憎のインフルエンザ騒ぎで今年は中止。前たり年の先行き不安

が、早くも的中したかと、ちょっぴり気分が暗くなる。

松の内の所在無れり、口記に書きつけたものを清書して、机の上の壁に貼り付けておこなつてゐる。

(註) この権兵衛峠、こまほトシナルが

けたのが、次のよつな五七五句。
キザな言葉で「自戒五ヶ条」と名付けたが、「夢の五ヶ条」と名付けた方が適切だつたのかも知れない。

剣の道 まだ半ばなる 八十路かな

春風の 一閃夢みし 劍豪生

ままならぬ 魚見自在の 劍の業

波立たぬ 懸待一致の 劍の業

禪門の 心外無刀とは これいかに

自戒五ヶ条

平成二十二年正月元旦 劍豪生

私は、小学校の一年生の頃から竹刀を振るよになつた。もつ七十年以上経つ。終戦後マッカーサーの指令で、剣道ができなくなつた約十三年間を除いて、欠かさず、竹刀を振つてゐる。

現在教士七段。これ以上は望むべくもないが、今まで私の心に刻み込まれている剣道の哲学が、上のよつな五七五に集約されてゐる気がすむ。ただし将来にわ

たつて達成不可能な極意だけに、私ことつては「夢の五ヶ条」なのである。

私は、小学校の六年生の時に、京都の武徳殿で行われた全国大会に出場し、主将として団体優勝を遂げた。

その時、優勝して嬉しかったと云つて、心底ほっとした。何故なら、その時負けていたら、後で監督のどんな叱責が待っていたか、その方が余つ程心配だつたのである。それ程、日頃怖い先生だった。今は「さき渋谷慶太郎先生、終生忘れた。今は」

稽古は勿論厳しかつた。小学生四年生になると、朝の登校は夏冬午前六時か七時、始業時間までみつちり稽古、昼休みも食事がすめば走つて道場に駆け付けた。修業後は勿論、少し遅れても容赦なく叱声と罵声が飛んでくる。

稽古は集団的に仕込まれ、技の稽古は専ら高等科の上級生の指導であつた。一人の先輩に一人か一人の後輩が割り当つてられ、後輩が強くならないとその先輩

が叱声を浴びる。だから、先輩も必死になつて私たちを特訓するのである。

手足はアカギレや握りタ「(勝負)で疲れあがり、容赦なく飛んでくる竹刀の折檻にて供たちは悲鳴を上げた。掛け声が泣き声に変わっていくのである。

連續掛かり稽古で、手足はへとへと萎えて、家路につくときは脚を引きずつて帰つた。しかし翌日になれば、しゃんと手足が伸びて足取りも軽くなるのが小學生。その辺の心身の状態を渋谷先生は十分に把握していた。

稽古の時、拳固で背中をグリグリこね回されると飛び上がるほど痛い。試合で相手の打突を躊躇なかつたりすると、此の鉄拳が容赦なく背中をえぐる。ある日私は、ぶつさん(私たちは渋谷先生の事をそう呼んでいた)の気配を背中に感じた。怒声が鉄拳に変わるのは間違いない。

私は、どうさに竹刀を振りかぶつた。ごつんと後ろでにぶい音がして「痛ッ」とぶつさんが頭を押されてくる。

私は、急いで面を外し防具を脱いだ。「俺はやめり」と言ひ捨てて家路を走つた。

私は、学校へ行きたくなかった。翌日から休もつと思つた。しかし、その夜からびつさんの口參が始まつた。ぶつさんの母親説得である。折角ここまで強くなつたのだから、全国大会は優勝間違いない。何とか息子を説得してくれ」と懇願するのである。

結局私は、母親の説得に負けて再び竹刀を握ることになった。

ほんの一週間程は、私に対する叱声はおだやかになつたよつた気がする。しかし喉元過ぎれば何とやら一である。

試合稽古で小手を打たれたら小手を脱げ、胴を打たれたら胴を外して試合をせよと云つ。相手の後ろから難刀で尻をつつく。構わず小手でも胴でも打つていけと命令するのである。

ぶつさんの怒りが頂点に達してくるとあたりに座つてゐる劍士たちが互いに自

分の竹刀を後ろに引つこめる。ぶつさん
は子供たちの尻を殴りつけた。数回
殴ると竹刀がグシャリと形が崩れる。自
分の竹刀が崩れるのが剣士たちは嫌で竹
刀を引っ込めるのだ。
今の世の中では恐らく考えられない過
酷な訓練だった。後で考えて、きっと軍
隊だったこんなに厳しくはないだらうと思
つたほど。

全国大会で優勝しても、嬉しさよりも
安心感が優先したのはもう一つ経緯から
である。

（小内科）

—— じといわせ・ひといじと ——

吉野則子

若この時はピアノ、フリメン、口
シャンソンなど洋ものばかり。最近
は口舞、長唄など邦楽にめざめまし
た。老後の楽しみいっぽいです。

殴ると竹刀がグシャリと形が崩れる。自
分の竹刀が崩れるのが剣士たちは嫌で竹
刀を引っ込めるのだ。

今の世の中では恐らく考えられない過
酷な訓練だった。後で考えて、きっと軍
隊だったこんなに厳しくはないだらうと思
つたほど。

防具の付け方を忘れていたが、何とか
助けてもらひて試合に臨む。準備運動な
しのぶつけ本番だった。

ところが、図らずもその日、我が医者
仲間が優勝してしまった。瓢箪から独楽
である。

それ以後だ。私の剣道意識が急に高ま
ったのは。新しく防具や稽古着、竹
刀を買ひ求め、子供たちと稽古するよつ
になつた。診療の合間にぬつて、小学校

子供時代の剣道修業については、この
辺りでじぶんよい。

私が医師になり故郷に帰り開業したら、
間もなく昔の剣道仲間がやつて來た。市

内で職域剣道大会をやるから出場してく
れ」と言つのである。「ちよつと待つた。
マジカーサー以来、防具も捨てて剣道の
事は忘れてこるよ」と言つた。「いや防
具は準備する。医者仲間で3人チームを
つくるのに、一人足りないから」と言つ
のである。

防具の付け方を忘れていたが、何とか
助けてもらひて試合に臨む。準備運動な
しのぶつけ本番だった。

ところが、図らずもその日、我が医者

仲間が優勝してしまった。瓢箪から独楽
は、小学校の教師になつたが、最後は東
京で校長を勤めた。それまでは剣道防具
をつけることもなかつたらしいが、定年
になつてから急に思い立つて竹刀を握つ
たと言つ。そして、六段になり七段に昇
格した。ぶつさんには「ぶつさんには教えられた剣道の基
本動作が骨の髄から甦つた」と彼も言つ

や後では中学校に出席し、子供たちが高
校に進学するもむづむづとなると高校の剣道場
に通つた。

以来、今日までずっと稽古を続けてい
る。

一週間に一回の稽古は現在でも欠かさ
ない。相手は子供であつたら大人であつ
たり。私の剣道の師匠は子供たちである
と言つてもいい。

その間、何とか五段、六段、七段と夫々一
回でパスしたのは、かつてのぶつさんの
指揮の賜物だらう。つまり基本動作をし
つかり身につけていたからだつたと思つ。
かつての優勝チームの仲間だったH君
は、小学校の教師になつたが、最後は東
京で校長を勤めた。それまでは剣道防具
をつけることもなかつたらしいが、定年
になつてから急に思い立つて竹刀を握つ
たと言つ。そして、六段になり七段に昇
格した。ぶつさんには「ぶつさんには教えられた剣道の基
本動作が骨の髄から甦つた」と彼も言つ

そつこえば「供たるの剣道の姿勢や業を見てると、その者たちの指導者の癖が判る。指導者の立派振る舞いがいつの間にか子供たちの心の中に染み込んでいるからだ」。

私は、昔自分が仕込まれたよつて子供たちにも勝負に勝つことを強要した。全国大会でもある程度の成績を残さないと満足しなかつた。しかし今では負け惜しみかもしれないが、勝つことよりも基本に沿つた剣道を指導してこつむつも矢張り私の歳のせいか。

さて話を年明けの「自戒五ヶ条」に戻そ。

今日のある新聞のエッセイ欄に、世阿弥の「初心忘るべからず」の解説が載っていた。初心に二つの「初心」がある。「是非ノ初心忘ルベカラズ」、それを時々ノ初心忘ルベカラズ」、老後ノ初心忘ルベカラズ」の二つ。

「是非ノ初心」とは既にJINの成功と

失敗を忘れるなど云つ意味りつ」。時々「初心」とは既に慣れた中壯年になってうねばれなこみひつ。そして最後の「老後ノ初心」とは無理をして老齢をやひますなど云つ」といふ。

どいも私の年代ほどの三輪重三郎やあるよつだ。大に思ひ当たる節がある。若に頃から一陣の春風がさつと桜の花を散らすよつて、剣の一振りで相手の面を仕留めたい。また「戻返し」のよつに返しの畢業で相手の胸を奪つたこと夢見ていた。それは今でも変わはない。

この歳にひとてはやきもしなつ相談だが

頭で夢みるくひこは世阿弥にも許してほしこと思ひ。夢だけだつたら老齢をひひけ出すこともないだひつか。

「觀見田在」これが難しこ。田じが観の田」と「見の田」の「つ」がある。相手と対戦したとき、相手の眼を見るなどは、武道の心得で読んだことがある。視点をどうに据えるか、これは大きな問題だ。相手の眼を見なつてどうを見るか。

相手の剣先と手元の拳に視線を合わせよと云ひ。相手から見れば洋洋とした田付きにならひし。相手の僅かな剣先の動きに心じて、技を仕かけるのである。

「觀の田」とは何か。相手の気配を察

するは、五感である。視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚。つまり総合的な感覺で相手の呼吸や間合、や気合を計る。それを「觀の田」と言つてこらひつ。この一つの目を働かせて、自分を相手より有利な立場に立たせなさ」と云つたのである。言ひはせぬへ、そつ簡単にできるものではない。

といひだ「觀の田」、「見の田」を持つことは、医師としても大事なことではないか。病状を觀察するのば、必ずしも「見の田」だけではなこ筈だ。「觀の田」が必要。データを含めて、視覚だけに頼つた診察では正確な病状の把握はできない。「觀の田」で患者さんの心の底まで見通す必要がある。そい」「ケースバイケースの難しさがある。まあならなこのは

剣の道だけではない。医の道もまたしかりである。

次の「懸待一致」、これも問題である。試合に臨んで先の氣位に立つことは、勝つための必須条件である。いずれも負けたくないから、互に先の氣位で臨んでこな。互に相手より先に打つといつてこの気分である。そこで、「一に一番」の業は「先先の先」である。つまり「機先を制する」こと。相手が出ようとしない隙間を狙つて先に打つのが上手の技。相手の出場を待つことである。

打つと出ぬといつてものの隙間が生じる。その隙間を辛抱強く待つのが、勝つための手段である。逸の気分を抑えながら、そして先の気分をゆるめないで待つ、それが「懸待一致」である。逸の気分を剣先に残らなければいけない。「波立たぬ」とこの二つのはやつことの私は理解していない。血脈に逸る人は必ず待つ事が苦手のようだ。

次に移るが、三国鉄舟の「剣神話」にて

こんな話が載っている。

楠正成が湊川で討ち死にする前夜、広嚴寺に極後禪師を訪れ、「生死の境とはどんなものか」と尋ねた。禪師は、「面頭を截断すれば、一剣天下に倚りて塞し」と正成はそれを聞いて、翻然として悟るところがあり、「利のない戦」と知りながら、勇躍戦場に赴いたところ。この禅語の意味は私には到底理解しがたい。剣道は事理の一つを修行せねばならぬこと。事は技、理は心である。事理が一致したところに妙所がある。

なきなり、「敵と相対する時、刀に依らずして心をもつて心を打つ、これを無刀と謂ひ」と。事理を極めれば無刀の境地に達するところ。それとも生死を超えたとき、無刀流が達成されるといふことか。

恐らく私は一生この境地には近寄れないだろ。竹刀剣道では無理な話である。

「血戒五ヶ条」も、この辺で「夢の五ヶ条」に切り替えて、轟りお醜をさらされぬよう精つぱく努めねばならない。

前章の記述

37頁 石井光子氏の「これまで」

ひとこと 専門書出版社に記入します。
年賀は出中、66頁の飯田文良氏の

俳句は

アルプスの峰がやきて初御室
初御室は誤りでした。

表3(裏表紙の内側)医家と真展の

「記述します。

今場は「つゝ フォトクロノ」 東京都

千代田区一番町25番地

です。 同 最下段の発行所の住所で小平氏とあるのは小平市誤り。

表紙 第54巻 春季号 通巻59
8号 の春季号は冬季号の誤り。

「迷惑をおかけしました。お詫びし